



黄金の女達



小島信夫

私の作家遍歴
I

潮出版社

黄金の女達・私の作家遍歴Ⅰ

©一九八〇
検印廃止

定価 三五〇〇円

昭和五十五年十月十五日 印刷
昭和五十五年十月二十五日 発行

著者 小島 信夫

発行者 富岡 勇吉

発行所 株式会社潮出版社

東京都千代田区飯田橋三一一―三

電話 東京(03) 230 〇七四一(販売部)

振替 東京五一六 一〇九〇

郵便番号一〇二

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替
えいたします

印刷 大日本印刷株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

黄金の女達・目次

1	黄金の女達……………	7
2	夢のなかの出雲の女……………	31
3	熊本のヘルン大家族……………	56
4	日本のもう一つの顔……………	83
5	日本の河……………	110
6	藍色の想い……………	138
7	椰子 ^{ヤシ} の下の夢……………	168
8	チェンバレン教授の眼……………	198
9	節夫人との結婚の秘密……………	227
10	もう一人の帰化人……………	255

11 東は東、西は西	280
12 ぼくは別人だ	304
13 ナポレオンの悩み	332
14 モンテ・クリスト伯邸の伊万里焼	360
15 野蠻にして聖なる隣国	385
16 復 活	410
17 近づくハムレットとドン・キホーテ	436
18 困窮文士学者救済協会	463
19 腹を立てた外国女性	492
あとがき	515

「最後の講義」

私の作家遍歴Ⅱ

私のイワンが東洋の海を
皇帝の使者
もう一人の使者
対 面
世界の泣き虫小僧
母のいない幼年時代
家庭の幸福
罵とうずら
完全な幸福
目を細めるアンナ
答えられぬ質問
さらば何をなすべきか
クロイツェル・ソナタ
妻への手紙
馬鹿と悪魔
ほんとに、芸術とは何か
戦場の幸福
馬のそばにいた者たち
青く高い空
八雲、最後の講義
平凡な少女の傑作
甘美な奉仕

「奴隷の寓話」

私の作家遍歴Ⅲ

天才の伝記はなぜ短いか
家と旅との交り目にこそ
円をえがきつつ
ファイサネス島の結婚式
夢魔の化身
愚者と賢者
もう一人の自分
影を売った男
奴隷の寓話
スキヤンダルの意味
対等であること
めざましい創意
自分はどこにいるか
仮面舞踏会
見過ごされる出来事
トレド市内の機屋
サンチョ・パンサの悩み
みんなが彼らの名を知っている
舞台と楽屋の境界
三人の画家
私のことを分ってくれ
誘惑する才能
危険な手紙
幕がおりるまで

装幀・田村義也

黄金の女達
私の作家遍歴
I

黄金の女達

小泉八雲、つまり、ラフォカディオ・ハーンが日本を訪れたのは、明治二十三年（一八九〇）のことであるが、それより二年前に西インド諸島のマルティニーク島に二年ばかり住みついた。

マルティニーク島には、ハーンより是一年前に人物がいる。ゴーガンである。ハーンはニューヨークから貿易風を利用して南下してきたが、ゴーガンはバナマを通つてきている。ハーンも同じようなめにあうが、ゴーガンはチフスにかかり、ほとんど無一文の状態で、生命からがらフランスに戻ってきたが、この島の印象は非常に強かつたようで、彼が南フランスでゴッホと共同生活をしたあとタヒチへ渡つたのは、ハーンが松江でセツと結婚した翌明治二十四年（一八九一）のことである。

マルティニーク島でハーンが発見したものの中でその見事さに驚異の念をもつて語っているのは、白人と黒人の混血の女たちのことである。それも世界中またとないような美しいバランスとしなやかさをもった、背の高いバナナ色をした女たちのことである。私も今度、ハーンの西インド諸島についての紀行文など二巻に目を通しながら、溜息をつかざるを得なかった。

ハーンは、アメリカ、ルイジアナ州のニューオリンズからニューヨークへ上つてきて、そこから南

の島へ発つてきた。ニューオリンズの旧市街に住んで新聞記者として名をあげていたが、その頃ヨーロッパの文学をホンヤクしたり二百近い紹介文をのせたりしていた。

その中にピエル・ロティとボードレールがある。ピエル・ロティは『お菊さん』の作者であつて、日本の長崎へやつてきたのは一八八五年だから、ちょうどハーンがニューオリンズにいたときのこと、ハーン自身はロティが長崎へきたことは知らなかったはずであるし、勿論『お菊さん』が出版されたときには、既に西インド諸島へ向つているときであつた。

「新しい浪漫主義者」と題されたこの紹介文は、次のような文章ではじまっている。

現在トンキンのユエ河口に碇泊中のフランスの鋼鉄艦アタラント号には、最も注目すべき現存作家が乗組んでいる。

しばらくあとに、こう書かれる。

一八七九年に彼の処女作が世に出た。この本は、浅黄色の紙表紙をもつ簡素な感じのものであつた。そしてその表紙は唐草模様でかざられていた——かすかにベールをすかしてみえるトルコの娘の顔がえがかれていた。(略)その本の扉には次の言葉がみられる——『アジャード』——「一八七六年五月一〇日にトルコ守備に参加し、一八七七年一〇月二七日にカールスの城壁のもとで戦死した一イギリス海軍少佐の手記と書簡との抜萃」。作者の名はピエル・ロティと記されていた。パリの新聞がこの変名の本人を暴露し「ピエル・ロティ」とはアタラント号乗組のブリターニュ出身

の若い海軍少佐、リシユアン・ヴィオーであることを報道したのは処女作が出版されてから五ヶ月後のことであつた。

ブリターニユはフランスの西北部で、同じフランスの中でもケルト族の血の流れている人々の住むところであり、ゴーガンも西インド諸島へ出かける前も帰つてからもここへやってきているのは、ひよつとしたら両親がその出なのであるのかもしれない。ハーンは母はギリシアのリュカディア島（現称レフカス島）の出身だが父はアイルランド人である。城主の末えいであるというからやはりケルト族と見ていい。

『アジャード』はヨーロッパ人士官とコンスタンチノーブルのハレムに住む女との間の恋愛物語であつた——特に小説的とは思えないかもしれぬテーマなのであつた。しかし挿話を扱う態度はまったく独創的なものであつたし、東方の生活の描写には驚嘆させられるものがあつた。

ハーンは、この作品についてトルコ奥地の楽しいスケッチ、東方の迷信や習慣を好奇心にみちた態度で書いた文章だといったあと、ヨーロッパ人が彼の外には誰も記録したことのない微に入り細をうがった記事だといって、それを例にあげたあと、なかならずく、空、雲、野、色彩を描いた文章だといっている。そして根本的に異国ふうであつてその幻想はブリターニユ人の心の特長となっているあの真似できない、何ともいへぬ奇怪な気分にみちみちている、という。七、八頁の紹介文であるが、やがてハーン自身が西インド諸島への旅で見るものを、そこから送った彼のスケッチを予想させるものの

ように思われる。ロティは一八五〇年生まれでハーンと同じ齡である。

同じ頃ハーンが「奇人の偶像」という題で紹介している作家に、ボードレールがいる。あの『悪の華』（一八五七）の詩人である。ボードレール（二二一六七）のことを語るついでに、ハーンは二人のフランス作家の名をあげている。やはり長い期間にわたって東洋に旅行したことのあるフロベールと、それからカイロでアラビア人の家を借りて住み、回教徒の服装をし奴隸市場で妻を購入したりしたネルヴァルである。そしてボードレールに戻ると、ハーンはこんなふうにいっている。

ボードレールは著述をはじめのまでには、世界の半分に及ぶ地域をすでに旅行していた。

『悪の華』にあらわれる黒色の美女は、空想上の人物ではなくて、現実にパリで生活していた。「ジャワの黒豹のように」しなやかでしかも心を魅する姿で存在していた、とハーンはいう。ジャンヌという名の女であって、彼女をうたい続けた。「すんなりと丈高い有色人種の娘であって、その黒い、美わしい、上品な顔には、ひどくカールした頭髮がふさふさと覆い、実に魅惑的であつた。その王妃のような容姿には、野性的な美をあふれさせ、何となく神々しさと野獸的なものとが見えた」というテオドール・ド・バンビルの『回想記』を引用している。

とにかく肉体と精神を徐々に消耗していった『悪の華』の詩人は、この女をたぶんインド洋かアフリカの海岸にあるどこか遠い植民地からヨーロッパに連れてきたのかもしれない、と述べている。そしてなつかしげに、ボードレールの散文詩の次の行の中にこの詩人の思い出を読みとっている。

米とサフランとをまぜた蟹のシチュー

こう書いた数年後、西インド諸島でハーンは同じような女と食物にめぐりあうことになるのである。明治二十年（一八八七）七月、二本マストの、オレンジ色の煙突のついた、長くて船幅の細い、優美な鋼鉄船でニューヨークから出発した、右目だけしか見えない、その目も強度の近視である五尺（一六〇センチ）そこそこの、既に三十八歳のラフォカディオ・ハーンの前に、海は次第に青さを増してくる。船中でグアドループからきた老紳士とのやりとりは、「まだまだこんなものではない」という老紳士の言葉ではね返される。着ているものが、ほとんど我慢ができぬくらい重くなってくる。そこで彼はこう考える。

風と水に、こうした人間の体を感じる暖かみと力があることを思うと、われわれの世界を形成しているいわゆる天地五行には靈氣があるのだ。

それから熱帯の果物や飲物のこと、熱帯の山風、熱帯の女のことなどがチラついてくる。ギアナの金鉱へ行く連中が黄金の夢を見ている。こういうありさまを、彼は物の怪が霧の如く音もなくあらわれ忍びこんできているのだ、と思う。

八日目にマルティニーク島のサン・ピエールに上陸する。岩をきりとって出来たような街で、海に向ってナダレこんでいるような感じである。ビクトル・ユーゴー通りは丘の斜面を上ったり窪地へ下りたり橋を渡ったりしながら、町の全長を貫通している、大通りを通って行くと、右と左に黄いろく

燃え輝いている家の壁と、頭上のリンドウ色の空のデコボコな帯との対照に魅せられてくる。また町のうしろにある緑燃ゆる山へ爪先上がりへのぼっている十字街を眺めるのも魅力がある。そこでアラビアン・ナイトの住民だ、と声をあげたくなるような、栗色がかった濃い黄色の、西インドの中では一番美しい混血人種の中にいることを知る。

この美しい混血の男女は、椰子の木のようにしゃんとして、しなやかで、上背があり、堂々として、ゆったりして品の良い動作で、力強い印象をあたえる。大股で歩き、全身の重みは素足の爪先ぎにバネみたいにかけられている。その歩く音はヒソヒソ声のようだ。

しかし、ハーンの眼は重い荷物を運ぶ女たちの方に向く、行商の女である。野菜、菓子、果物、煮炊きした食料などを戸毎に売って歩く。彼女らはハダシで百ポンドから百五十ポンドの荷を頭にのせて、一日中暑い太陽にてらされて山を登ったり下ったりする。そのうち彼はほかの連中とは全然違う、珍しい人種に気がついた、と報告している。

それは皮膚が完全な金色、みごとに金属のような黄色で、目が切れ長で、絹糸のような睫毛が長く、髪は厚髪で、つやのある縮れ毛が、日なたに出ると青光りを放つ。どんな人種が交配して、こんな美しいタイプをつくり出したのだろうか？ この地方には、一見して中国人型の美しいタイプがあるけれども、それとも違うし、クーリーでもないし、アフリカ人でもない。ある特異な血がこの混血にはあるようだ。

（「真夏の熱帯行」）

北方のアイランド人の父と南方のギリシア人の母とから生まれたラフォカディオはオハイオ州シ

ンシナチで『エンクワイヤラー』という新聞社の記者をしているときに、下宿先きに働いていたマツティ・フォリーという炊事婦に親切に看護されたことが元で結婚することになった。年譜によると、友人達の反対を押しきって法的な結婚許可証も得ないで、式をあげてしまった。白人と黒人との結婚は法律で禁じられていた。南北戦争が終ったのが十年前のことであり、今でも州によっては許可されていない。この結婚は女が急に我儘になりはじめて失敗したし、社もやめさせられた。年譜のは、一説によると、いや気がさした社をやめるために結婚を理由にしたということである。ニューオリンズへ行ったときには、彼女とは別れていた模様である。

つまり、ボードレールやピエル・ロティの紹介を熱をこめて行なっていた彼に、このような混血黒人との同様の経験があったのである。そうして西インドでクレオール（西インド諸島の白人、または混血白人）を彼は見ていたのである。

ここにもう一つ重大なことがある。あとになって東京大学で文学講義をするようになったとき、批評家として、イギリスのコールリッジにも匹敵すべき人物であるという評判を得るようになった。立派な内容を上手に分り易くしゃべった。つまり一流だということである。その一連のものの中で行なった感動的な講義の一つに、「進化論哲学と文学」というのがある。ここで特にハーバート・スペンサーのえらさを日本人の学生に語ってきかせた。このことについては、第二回または第三回の私の文章の中でくわしく述べるつもりでいるが、彼の書いた文章のいたるところでスペンサーの『第一原理』との出合いが、いかに自分に大きな影響をあたえてしまったかをくり返し述べている。スペンサーそのものも、それから彼の受けたものも、私たちが気楽に考える程度をはるかに超えたもので、彼の一生はスペンサーをいよいよ深く理解していく過程なのである。

進化論というともう古くさい当り前のことだ、と思つてしまうものも多いし、それにスペンサーという、まったく知らない人が多いが、いくらかでも知っている人にしても、もう現代の私たちにアピールするものは何もないかのような錯覚をおこしかねない。ましてこの学説が発表された当時どれほど人々を驚かせ途方にくれさせたか、ということをはんとするには理解する人は案外少ない。私自身理解しないでいたのだ。ハーンはスペンサーの易しいようで難かしい乾いた文章を読んだとき、自分はこの驚天動地の新しい考え方の何分の一かを知つていたと感じたに違いないと思う。それはどういうことかという、こうなのだ。彼が二本マストの船の上で、風と水にギリシアの哲学者の感じたようなことばかりでなく、あの眠くなるような重さや、霧の如く音もなく忍びよつてくるところの白昼夢の物の怪を感じたということがそうなのである。それからマルティニーク島の男や女たちがハダシの足で囁くように歩いてくるということが、そうなのである。なるほど、それは詩的幻想に過ぎないように見える。ところが、それが進化論とかんけいがある。このときハーン自身は気づかなかつたかもしれないが、実はほとんど気づいていたのだ。勿論完全に気づくようになるには、日本行きを待たなければならなかつたが。

その後わたしは、この特異な美しい混血人種の謎がわかつた。

とハーンは「真夏の熱帯行」の中で書いている。マルティニークから五千キロほどの旅をした彼は、南米に近いトリニダード島へも赴いているが、別のこの島にも見られる標本だといっている。三つの要素が結び合っている、とこういう。三つとはヨーロッパ人、ニグロ、インド人である。ところが、